
稲川淳二の妖怪遭遇譚

ラミトン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

稲川淳二の妖怪遭遇譚

【Nコード】

N1892W

【作者名】

ラミトン

【あらすじ】

皆さんはあのー、妖怪つてもんを見たことがありますでしょうかね。幽霊じゃないですよ、妖怪です。今日はね、その妖怪と不思議な神社のお話を、皆さんに聞いていただくかと思えます。

あの頃はまあー、私も結構無茶やってみましたから。体当たりなコメントなんかもやらせてもらったりなんかしてね。ある番組が終わって打ち上げやった時なんかもその延長で、みんなむちゃくちゃ飲み方するんですよ。で、みーんな潰れちゃう。私は「いやー結構、いやー結構」なんつって断ってたんで、まあそんなでもなかった。

そんでーみんな寝ちゃうでしょ。でも一人だけ起きてるんですよ。そんな時よく一緒にやってたディレクターの 仮に、Aとときましようか。そのAがね、みーんな寝ちゃうてるのに起きてる。

どうしたのかなーと思って、Aのグラスも空でしたからね。まだ入ってるビール瓶持って、まあ一杯やるうよと。そしたらAが言うんですよ。

「淳ちゃん、俺見ちゃった」

あーまただなーって思いましたね。私ほら、こういうお仕事してるでしょ。だからみんな、私に見ちゃったって言うんですよ。幽霊まあ大概が見間違いかなんかなのでね、私も真剣にならないで「へえそう。どんなの？」って軽く聞き返した。

まあこうなるとね、大体「窓の外に顔が」とか「階段に足首が」って言うでしょ。定番ですからねー、自分も見た気になっちゃうんですよ。本物かどうか分かんないから、みんな案外気楽に相談してくる。冗談半分で「呪われちゃうかなー」なんつってね。

でも、こうー、Aはなんか違うんですよ。切羽詰まったっていいかね。酒もほとんど飲んでないみたいで、他の連中とも話してなかったらしい。どうしたのかなーって思っていると、Aがサーっと真

っ青な顔してね、「いやさ淳ちゃん、俺が見たの、幽霊じゃないんだよ」って言うんですよ。また変なこと言う奴だなーと。だってそうでしょ、私ってばお化けのほうではっか有名になっちゃってるから。おかしな動物でも見たんなら私に話すはずがない。よしんば言っただとしても、酒の肴の笑い話ですよ。

でも違う。真っ青で真剣なんですよ、Aは。ホントに真っ青でね。「じゃ何を見たのよ」って聞いたら、Aはコップを机に置いて、

「妖怪だよ、妖怪見ちゃった」

さすがにね、「冗談だろうと思いましたがよ。私いろいろな経験しましたし、まあぼちぼち見えます。あれね。でも妖怪ってなると違うでしょ。

だから私聞いたんですよ。「お前それ、幽霊じゃないのか」って。間違えたのかと思ってね。でも違うって言う。妖怪って言うんですよ。

彼がやってた番組にね、自然の中をひたすら歩くってやつがあつてね。私もいっぺんだけやらせてもらったことあるんですけど、まあいい番組でしたよ。綺麗な川辺を歩いたりね。見るほうも気持ちよくなれちゃうテレビ。

で、彼もその現場についていく機会があつたそうなんですよ。結構な山奥をのんびり歩いていく機会があつたそうなんですよ。結局撮影も中止になつちやっただけでね。スタッフもみんな口を閉ざしちゃってるらしいんです。

まあーなんせ私も若かったですからね。興味が出ちゃった。幽霊じゃなくて妖怪だからね。怖いもの見たさっていうよりも、あのー、ツチノコ探してみたいなもんですよ。「行こうよ。もっぺん撮ろうよ」なんてね。Aは渋りましたけど、最後は断れなくて頷いた。

正直本気にしてたってわけじゃないんですけどね、もし本当に妖怪なんてもんが撮れたら、そりやもうすごいでしょ。スクープですよ。Aはずっと暗い顔してましたけど、私はりきっちゃいましたね。

で、一ヶ月くらいですかね。私デザイナーなもんだから、ちょこちょこつと書いてた。そしたら、

トゥルルルルル、トゥルルルルル

電話が鳴る。「はいもしもし」ってやると、Aだった。「淳ちゃん、明後日行ってくつて」「ああそうかい」ってね。

でまあ、行ったわけです。本当に山奥でね、夏だけど蝉がほとんど鳴いてない。風がサーって吹いて木がシャワシャワシャワーってなる音しかしない。ちょつと気味悪いなーって思いながら、スタツフ十人くらいで地主さんところに行つたんです。

で、この地主さんがね、言うんですよ。「山奥入るの？ やめときなよー」って。「神隠しに会うよー」って言う。なに言ってるの、なんて笑いながら、みんな本気にしなかった。

そんじゃ行こうかーってみんなで山を登り始める。Aは終始真っ青でね。どうしたのって訊ねても、首を横に振って「もう帰ろう、

もう帰ろう」って。弱気なやつだなーと思いつつ、ああでも、こいつは見たんだなってね。怖いですからね、一度見たところに行くつてのは。

登ってる間もカメラ回ってますから、まあいろいろ喋りながら登りました。「あー綺麗だねー」「あー空気うまいねー」って。スタッフも気分よかったんでしょね、みんな笑ってましたよ。A以外ね。

結構登ったねーって頃に、突然カメラさんが「あ、ごめんなさい」って言う。「カメラ止まっちゃった」って。おいおいそりゃないよって思ったら、音声さんも「マイク止まってる」って。彼らプロですから、普段そんなことあり得ないわけですよ。すぐ原因なんて分かるはずなのに。

まあそれなりに撮れたから、編集でなんとかしましょうってことで落ち着いたんです。で、降りるかーってことになる。そしたら音声さんが「あれ？」って。その場にいる女性は照明さんだけだったから、彼女に「お前なんか言ったか？」って聞いたんですね。彼女は言っていないって。

どうしたのって聞いたら、音声さんが「女の声が入ってる」って。マイク壊れてるんですよ。私たちの声は拾ってないのに、女の声が入ってるって言うんですよ。おかしいなーって思いながら、「どんな声よ」って聞いた。したら突然、それまで真っ青な顔してたAが突然、

「あああああああッ！」

あんまりいきなりだからウワツってなったけど、Aが頭抱えてし

やがみこんだもんだから「おいおい大丈夫かお前」って肩叩いたら、「いる、いる」って呟いてる。スタッフもみんな首傾げて、ちよつと疲れちゃったんじゃないかって。

なんとかAを立ち上がらせて、そんじゃ早いとこ山を降りようってなことになるって、下り始めたわけですよ。でー、十分二十分経ったくらいかな、音声さんが立ち止まった。律儀な男でね、歩きながらもマイク動かかなーってやってたんですけど、立ち止まって真っ青になってるんですよ。「どうしたの」って聞いたら、「いる、いますよ稲川さん」って。おいおいこいつもかって、こうなるとみんな怖くなっちゃうから、早く降りようってバーツと降りました。

なんせ道順なんか辿ってられない。とにかく降りなきやーウワァーって。その間もAは「くる、くる！」って叫んでるし、音声さんも「まだ聞こえる、まだ聞こえる」って。

で、みんなバァーと走ってたけど、ふと私だけ立ち止まった。気づいたんですね。あることに。

音がね、ないんですよ。

さっきまでは風がサーって鳴ってたし木もシャワシャワ言ったのに、それがないんですよ。風はあるし木も揺れてるのに、音がないんですよ。

あーこれはまずいってね。私もいろいろ経験しましたけど、音がないうって時は近くにいますよ。幽霊か妖怪か知らないけど、あーなんかいるなーって思った。

まずいなーって思いながら前見て、あちゃーってなりましたね。

みんないない。先行っちゃった。立ち止まった私が悪かったわけですから、責められませんか。

もちろん私も怖かったもんだから、とにかく走った。でも一向に下れないですよ。おかしいですよねえー山なのに、ずっと平地なんですよ。これはいいよやばいなーって、汗びっしょりでね。

それでも走るしかないから、ずーっと走った。ずー、ずーっと走ったんです。でもいくら若くたって限界がありますからね、「もうだめだ、走れない」って倒れちゃった。どういうわけか、そのまま意識なくしちゃったんです。

で、まーどのくらい分かりませんが、目が覚めた。さっきまでいた山の中じゃなくなってるね、神社。神社にいたんですよ。ふるーい鳥居があつて、建物なんかポロポロでね。そこらに貼つてあるお札には博麗って書いてる。博麗神社なんて聞いたことないですからね、あーこれは人の来るところじゃないかと、そう思ったんですよ。

神社なら悪いのはよってこないけど、そのままここに居るわけにもいかないもんだから、ちよつとだけ休ませてもらおうと縁側に座った。で一息ついてると、風がフワァーって気持ちよくてね。気づいたら音も戻ってたもんで、あぁもう大丈夫だなーって目を閉じたんですね。

一秒も経っていませんよ。経っていませんけど、目を開けてびっくりしましたよ。あんなにポロポロだった神社がね、綺麗なんですよ。小綺麗でね、鳥居も綺麗なもんです。

おかしいぞと思って立ち上がったら、ちょうど建物の反対側からあーだこーだ言ってる声が聞こえる。女の　女の子ですね。声が聞こえてくるんですよ。怖いってよりも、人間の声でしたからね。あー助かったと思って「おーい」って近寄った。

そこにいたのは巫女さんでね。十二、三歳くらいですかねえ、黒髪で可愛い女の子でしたよ。大きなリボンなんかつけてね。服がちよっとおかしくて、脇が見えてましたけどね。

ともかく人間なもんだから、「いやぁ助かった。降りる道教えてもらえませんかね」って言ったたら、その子は驚きもしないで「また外来人？」って言うんですよ。外来人って、私日本人ですから、「いや日本人だよ、助けてくれよ」って頼み込んだ。すると巫女さんはまあー生意気な顔でね、「降りたければその階段を下りればいいわ」なんつって、神社の階段を指差すんですね。

感じ悪いなーって思いながら、「山を降りる道を教えてくれ」ってお願いした。でも彼女はやっぱり階段を下りるの一点張りでね。私も腹立てちゃって、もういいやってなっちゃった。

仕方ないから自力で降りるかと思って、階段に向かったんですけどもふと思い出した。

あの巫女さん、誰かと話してたよなーってね。

私が巫女さんところに行くまでの時間と、そこにいたもう一人がどっかに行く時間、合わないんですよ。建物の中には入れないし、裏に回るには遠すぎる。他に行く方向っていったら、私が来た方ですから、すれ違ってるはずですからね。

なんだよ気味悪いなーって思いながら、神社も綺麗になってたからね。怖いもんだから、さっさと帰ることにしたんです。

階段をコツコツコツコツって下りて、長い階段ですから、あーしんどいなあーって思ったころですよ。ずーっと下の方に、これねえなんて説明したらいいのかな。空中にね、黒くて細ーいスキマがあるんですよ。切れ目っていうのかな。あり得ないんですけど、あるんですよ。

なんだよあれって思ったけど、降りなきゃ帰れない。さつさと駆け下りようと思って走り出すと、徐々にスキマと近くなる。当たり前のことなんですけど、おかしいなーって思った。ずいぶん早く距離が縮まるんですね。私はそこで「あっ」って声上げましたね。

スキマもね、動いてるんですよ。こつちに向かってくるんです。あれはねー幽霊の仕業じゃない。あんなはっきりしないもんね、幽霊は。

もう必死に駆け下りて、怖くて。スキマの横を駆け抜けようとした時にその切れ目から又ウウツって女の体が出てきた。金髪の女でしたよ。「ウワァーッ！」ってのけぞって転びそうになったら、その切れ目から上半身だけ出た女がガアッと腕を掴むんですよ。振りほどこうと思って力入れてるのに、全然びくともしない。女の細い腕なのにちつとも動かないんですよ。「やめろオーッ！」って叫んだらば、女はニイーっと不気味に笑って、

「境界を越えるな、この郷から住ね」

って言うんですよ。Aが妖怪を見たって言うてたのを思い出して、もうこうなると信じちゃいますから。食われるーってね、冗談みたいに聞こえるでしょうけど、この女に食われるって思ったんですよ。できる限りの力でもって、「放せーッ！」って叫んだら、パツと手が放れた。

勢い余ってゴロゴロって階段を転げ落ちてドーンツと倒れてそのままフーツと意識が薄れていつちゃった。このままじゃ食われる、まずいって思いながらもフワーと薄れていく。そんな時に、さっきのスキマから出てきた女の声がするんですよ。「あなたは幻想を語

れる」とか「妖怪の食料にするのは惜しい」とか、理解できませんでしたけどね。で、そのままスウーと気を失っちゃいました。

目を覚ますと、乗ってきたロケバスの中でね、ブルオロロロロってエンジン音がして、最初は夢かと思いましたよ。でも夕暮れで、もう帰り道でした。スタッフみんな青い顔しててね、ああ本当だったんだって。

音声さんが聞いた声は、マイクが確かに拾ってたつてのどこにも入ってませんでした。彼は女の声だったって言うってたもんだから、あああのスキマ女だなと。確証はありませんけどね。

ともかく助かった。ハアーっと息をついたらば、隣に座ってたAが「見ただろ？ 見たか？」って。彼も顔色悪かったですね。私も頷くしかなかった。あんなはつきりと化け物を見たのは、最初で最後でしたから。

その後は案外霊障もなんもなくてね。こういうもんなのかなあーって思いましたよ。なんせあの女も巫女さんも、幽霊じゃないんだからね。

結局あの巫女さんが誰だったのか、なんであの神社が綺麗に直ったのかは分かりませんでした。まああのー、もしかしたら、時間を越えたりしたのかもしれないね。分かりませんけどね。

ただまあ、これだけは、私もすっかり分かりました。ええ、信じてもらえないかもしれませんが。信じてもらわなくても結構です。

でもね、いるんですよ。妖怪。私、この目で見ちゃいましたからね。

了

(後書き)

イナジュンチックな語りができていたら幸いです。もっと擬音を
使いたかったかも……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1892w/>

稲川淳二の妖怪遭遇譚

2011年10月9日15時24分発行